

Nejirebane, No. 73

15.Jun., 1996

地下水生ゲンゴロウ採集覚え書き

北山 昭

〒564 吹田市末広町21-5-313

1. 地下水生ゲンゴロウとは

ゲンゴロウ類は、日本からムカシゲンゴロウ科、コツブゲンゴロウ科、ゲンゴロウ科の3科が知られ、約120種が記録されている。成虫、幼虫ともに水生であり、甲虫類のなかではもっとも水中生活に適応したグループである。その生息域は巨視的には純海水を除くあらゆる水域に広がっている。

地下水には複眼や後翅、色素が退化し、かわりに感覚毛がよく発達したゲンゴロウ類が生息する。佐藤(1980)は、世界の地下水生ゲンゴロウ類の解説を行い、その目録を付している。それによると、世界から10種1亜種が記載され、このなかにはメキシコの洞窟から発見された、複眼が小さく色素の退化や感覚毛の発達は認められるが、後翅の退化は見られない移行過程を想像させる種も含まれているようである。

日本からは、UENO(1957)によってムカシゲンゴロウとメクラゲンゴロウ(1亜種を含む)の2種が記載されており、ムカシゲンゴロウ科は現在のところ日本のみから記録されている。2種ともに近畿地方のごく限られた地域のみから記録されているが、古くに四国や九州から得られた未記載種が若干あり、ごく最近になって新属新種となる種が愛媛県から得られている。この種については、テレビや新聞などの一部の報道機関で取り上げられ、上野俊一博士によって発表される予定であると聞く。

2. 数十年ぶりに採集された地下水生ゲンゴロウ

堅い話はさておき、当時ゲンゴロウを求めて全国をすくい歩いていた私は、未だ採集していない種は何でも採りたいと思っていた。特にムカシゲンゴロウやメクラゲンゴロウのような特異な種はなおさらで、ぜひ自分で採集して生きた姿を見たいと思っていた。

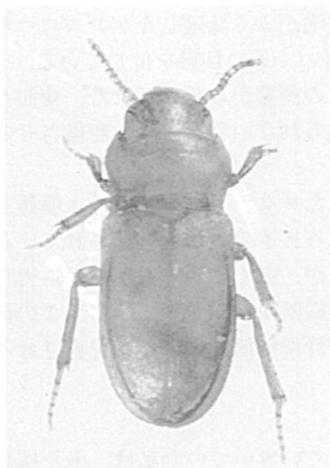
阿部光典(1988)は、「ゲンゴロウの生息地を訪ねて」のなかで、地下水生のゲンゴロウを「とても採れそうにないもの」と記している。これを読んでとても採れそうもないと思えたが、逆に地下水の環境は昔とほとんど変わっていないような気もして、良い井戸さえあればもしかすると今でも採れるのではないかとも思えるのであった。

それからしばらくして、環境庁(1980)に、京都府の特定昆虫として両種が掲載され、採集年月日は記されていないものの、その生息数はムカシゲンゴロウが++、メクラゲンゴロウに至っては+++と報告されていることを知った。産地は両種とも天竜寺境内で、採集者の岸井尚博士は私の大学の大先輩である。さっそく電話を入れ、採集時の状況を聞いてみた。調査年度が1978年であったため、比較的近年のデータであることを期待したが、残念ながら、採集年は両種が記載される前後の1950年代であった。

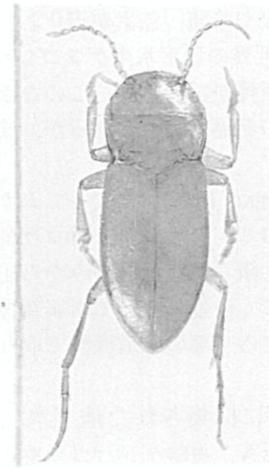
その採集談によると、天竜寺に下宿されていた当時、毎朝井戸水を洗面器に汲み顔を洗っていたそうで、ある日、いつものように顔を洗おうと洗面器を見ると1匹のメクラゲンゴロウが泳いでいたそうである。それから、毎日運動がてらに井戸水を汲み上げ多くの個体を採集したという。我慢して1,000回くらい井戸のポンプを押し続けると出てくるそうである。ただし、両種の採れた天竜寺の井戸はもうないであろうとのことであった。

数日後、天竜寺を訪れてみたが、井戸は言われたとおりになくなっていた。しかし、寺の周辺を探して歩いたら、手押し式の井戸が残っている寺や家はあるだろうと安易に考えていた。たくさんの社寺がある嵯峨野で井戸を探して聞き歩いたが、まったく手がかりがなかった。ただ唯一、墓地のすみに手押し式の井戸がある寺を見つけたが、赤茶けた水が出てきてとても採れるような井戸とは思えなかった。

嵯峨野で惨敗を喫した私は、その後、平安高校に岸井博士を訪ね、両種とともに多くのゲンゴロウ類の標本を見せていただいた。なかにはカンムリセスジゲンゴウのタイプや、今では日本からは絶滅したのではないかと考えているスジゲンゴロウなどの貴重な標本も含まれていた。そして、帰りに細い管ビンの中でエタノールに浸かったムカシゲンゴロウとメクラゲンゴロウの標本を下さった。私は喜び勇んで帰り、さっそく標本をマウントしてその特異な形態をビノキュラでいつまでも観察していた。ただ、40年近くもエタノールに浸かっていた標本は濃褐色で、色素の退化したあの独特の透き通るような飴色を呈してはいなかった。生きた個体をどうしても見たいと思った私は、



ムカシゲンゴロウ



メクラゲンゴロウ

その後もあちこちの井戸を探して歩いたが、なかなか手押し式の井戸は見つからず、運良く畑の中

などに見つけ必死の思いで汲んでみても何も出てこなかった。

その後、当時執筆中であった図説日本のゲンゴロウの件で、佐藤正孝博士を訪ねていった際、井戸を探しているがなかなか見つからないという話をしていると、兵庫県のM先生が地下水生の動物の調査をされているので詳しいのではないかとの情報と連絡先を教えて下さった。後日、電話を入れてみたところ、なんと最近姫路市内の井戸でメクラゲンゴロウの死骸を見つけれられたとのことで、親切にその井戸について教えて下さった。その井戸はモーター式の井戸だが、パイプが地上に出たところにフィルターがあり、メクラゲンゴロウの死骸が引っかかっていたそうである。

その足で姫路に向かった私は、井戸の持ち主に事情を話し、採集の許可をもらった。まず、フィルター部に網を取り付けたかったので、工具を借りて水を遮断し、フィルターの蓋を外して見て驚いた。なんと、フィルターには数個体のメクラゲンゴロウの死骸が引っかかっていたのである。これは意外と多くの個体を採集できるのではないかと思いきや興奮した私は、その死骸を慎重にフィルターから外してから、勢いよく水を流しだした。

しかし、最初の予想に反して3時間以上たってもメクラゲンゴロウはまったく出てこない。もしヤムカシゲンゴロウが採れるかも知れないと思い、時々水を止めて網の中を詳しく点検してみるが、こちらも入っていない。ただ、イトミミズの種類や等脚類の一種が少し入っていた。

もともと、フィルター部分から水が流れ出るはずもないので、下には排水溝もなく、長時間の排水によって、すでにあたりは一面水浸しになっていた。さすがに気が引けてもう諦めようと思った頃、点検した網に1匹のメクラゲンゴロウが入っていた。初めて見る本種は、思っていたより濃い色彩をしていたが、やはり半透明の鉛色であった。網にたまった砂とともにフィルムケースに収容し、にやける顔をこらえて丁寧に敬礼を言って井戸を後にした。

帰宅してから、ビノキュラでこの個体をつぶさに観察していると、砂の中でなにやら蠢くものに気がついた。あわてて、ピントを合わせてみると、なんとムカシゲンゴロウが1匹ゆっくりと底を這っていたのであった。1992年11月29日のことであった。

このようにして、おそらく数十年ぶりと思われる地下水生の2種のゲンゴロウは再び採集された。前述したように、地下水生のゲンゴロウは現在までに近畿地方のほか、四国、九州の一部だけから採集されているが、熱心に井戸を調査すれば、その他の地方でも発見される可能性は高いと思われる。そして、それらの地域で採集された種は新種である可能性も十分あると思われる。興味のある方には、ぜひ地元の井戸に注目して採集を試みて欲しいものである。

末筆ながら、文中にお名前を出させて頂いた先生方、拙文を書く機会を与えて下さった水野弘造氏に心からお礼申し上げる。

<参考文献>

- 阿部光典,1988.ゲンゴロウの生息地を訪ねて.昆虫と自然,23(7):19-23.
 環境庁,1980.日本の重要な昆虫類 近畿版.
 森正人・北山昭,1993.図説日本のゲンゴロウ.文一総合出版(東京).
 佐藤正孝,1980.日本の水生甲虫類概説I.水生食肉亜目.昆虫と自然,15(10):11-18.
 UENO,S., 1957.Blind aquatic beetles of Japan,with some accounts of the fauna of Japanese subterranean waters.Arch.f.Hydrobiol.,53(2):250-296.
 (きたやまあきら)

ちょっと気になる甲虫の情報 -- (I)

構成種が1種あるいはごく少数の種に限られる科の甲虫というのは、雑甲虫屋としては何としても入手しておきたいものである。

それが Synchronoidae ヒラタナガクチキムシ科の *Synchroa melanotoides* LEWIS ヒメコマツキガタナ

ガクチキのような広く分布してさほどの苦勞もなしに叩き網に落ちてくるような虫だと興味の対象にはならないが、そこいらの標本箱にめったに入っていない虫だと、どうすれば採れるんだ? ということで、情報価値もあろうかと思う。今回は、Pythidae キカワムシ科 (現在、日本産は2種とされているが、1~2種の追加があるかも知れない。) の1種クロキカワムシにスポットを当てて見た。(水野)

クロキカワムシ *Pytho ezoensis* KÔNO

(1) クロキカワムシの奈良県における採集例

望月 寛人

〒584 富田林市向陽台3丁目3番10-505

近畿では採集例が少ないと思われるクロキカワムシ *Pytho yezoensis* KÔNO を次のように奈良県で採集した。

1 ex., 奈良県川上村北股川林道 (三之公), 27. IV. 1991.

2 exs., 同所, 11. V. 1991.

10 exs., 奈良県川上村北股川林道 (奥玉谷), 29. XI. 1992. 全て望月 寛人 (採)

三之公林道では、土場跡に伐採枝がたくさん放置されているところがあり、この上を何頭かがはいまわっていた。たしか翌春も、ゴールデンウィークの頃同じ場所で見られたと記憶している。その後、晩秋に *Rhagium* を狙って行ったところ、細いアカマツ伐採木があるくらいで、*Rhagium* は空振りであったが、この伐採木の樹皮を剥ぐとクロキカワムシが何頭も出てきた。本種は高山の針葉樹皮下に棲息するとされているが、当地は標高500~600mぐらいの谷であり、低山地にも広く分布しているのかもしれない。(もちずきひろと)

(2) 南アルプス北部でのクロキカワムシの採集例

水野 弘造

〒611 宇治市木幡熊小路 19-35

南アルプス鳳凰山 (山梨県韮崎市; 標高 2,841 m) は高山の中では比較的登山の容易な山で、甲虫採集家に残された好採集地の一つと云える。鳳凰小屋 (標高 2,382 m) のごく近くに、天然カラマツの衰弱木が数本まとまっているガレ場があって、このカラマツを見回ると、カラマツカミキリ *Tetropium morishimaorum* KUSAMA et TAKAKUWA が発生期には樹幹を這いまわっている。

1995年7月28-31日に、このカラマツから17頭のカラマツカミキリを採集した (ほかに数人の採集者が入れ替わり立ち替わり採集したので、この期間の合計数は50頭に近いと思われる。) のであるが、同時に3頭のクロキカワムシを採集した。カラマツカミキリと同じように昼間、生木樹幹の樹皮上を這っていたものである。おそらくそのカラマツから羽脱したものであろう。

なおこのカラマツから程遠くない場所にシラビソの倒木があって、夜間懐中電灯で見回ると、樹皮上に産卵中のオオキカワムシ *Pytho nivalis* LEWIS も見つけることができた。(みずのこうぞう)

滋賀県産ナガクチキムシの記録

水野 弘造

〒611 宇治市木幡熊小路 19-35

滋賀県のナガクチキムシに関しては、水野（1985）* が 21 種類を記録した後、断片的な報告によって徐々にその産出種類数が増えてきているが、隣接府県に比較して、その数はまだかなり見劣りする。

同好諸氏のご協力で次の4種の標本を確認したのでここに記録する。

- 1) *Holostrophus morimotoi* SASAJI モリモトヒメナガクチキムシ
1ex., 永源寺町甲津畑, 29. IX. 1991, 正木清 (採)
- 2) *Orchesia diversenotata* PIC マルモンニセハナノミ
1ex., 永源寺町甲津畑, 3. VII. 1977, 正木清 (採)
- 3) *Dircaeomorpha validicornis* (LEWIS) ムツモンナガクチキムシ
1ex., 志賀町比良山, 18. VII. 1991, 西田信夫 (採)
- 4) *Melandrya flavonotata* PIC ヨツモンナガクチキムシ
1ex., 永源寺町綿向山, 5. VI. 1988, 伊藤昇 (採)

これらを加えても、滋賀県産のナガクチキムシの記録は34種に過ぎず、隣接する京都府（46種）、福井県（55種）、岐阜県（55種）、三重県（61種；ただし未発表のものを含む。）に比較して、その調査の不十分さがうかがわれる。同好諸氏の積極的な記録発表を切望する。

*水野 弘造（1985）：月刊むし，（167），19-20.

（みずのこうぞう）

韓国南部のヤマトエンマコガネについて

田中 勇・田中 稔

〒662 西宮市六軒町8-7

ヤマトエンマコガネ *Onthophagus japonicus* HAROLD は現在日本国内における確実な産地はないようであるが、韓国南部の二か所で本種を採集しているので、少し古いデータであるが、その時の様子を含めて記録しておく。

- (1) 6♂♂, 6♀♀, 舊助羅, 巨濟郡 (巨濟島), 慶尚南道, 27.IV-3.V.1991, 田中稔(採)

当日は薄ら寒い日であったが、前日に設置した海岸近くのアベマキ林の虎の糞に、ヒメエンマコガネ、カドマルエンマコガネ、フトカドエンマコガネとともに来ていた。糞の周囲30cm内外の土中より掘り出して採集した。本種の生時は、図鑑で見慣れたかき色に黒の紋でなく、白色に黒の紋の印象であったので、始めはヤマトエンマを採った！とは感じなかった（標本にするとかき色に黒の紋になった）。なお付近の



巨濟島産ヤマトエンマコガネ♂

麦畑の、牛・山羊の糞にはオオマグソコガネ、ウスイロマグソコガネが見られた。

(2) 4♂♂, 8♀, 尖察山, 珍島郡(珍島), 全羅南道, 30.IX-5.X.1993, 田中稔(採)

当日は乾いた風が吹いて寒いくらいだったが、河原に点々とつながれた牛の糞より採集できた。他にはカドマルエンマコガネ、コブマルエンマコガネ、オオフタホシマグソコガネ(多い)、ヨツボシマグソコガネが見られた。

このときのヤマトエンマコガネ、オオフタホシマグソコガネに亜硫酸ガス処理を試みたが、オオフタホシマグソコガネは生時の色彩が残ったが、ヤマトエンマコガネにはあまり効果がなかったことを付記しておく。(たなかいさむ・たなかみのる)

奈良県におけるルイスホソカタムシの記録

生川 展行

〒513 鈴鹿市木田町 2399

Gempylodes lewisii SHARP ルイスホソカタムシは、奈良県では春日山(高橋, 1991)での記録以外は少ないようであるが、筆者は下記の標本を所蔵しているので報告する。

1 ex., 奈良県吉野郡大塔村篠, 13. VIII. 1989, 官能 健次(採), 筆者保管。

官能氏によると、道路沿いにあった土場の足場用木の上を、はっていた個体を得たとのことである。なお文末ではあるが、貴重な標本を恵与いただいた官能健次氏に、心よりお礼申し上げる。

<文献>

高橋 敏(1991) 奈良公園の甲虫: 京都府南部の甲虫相との比較。奈良公園の甲虫(1)。京都府 南部の甲虫(VI)。関西甲虫談話会資料(1): 45。 (なるかわのぶゆき)

虫屋の広場

かねてより準備中であった「双翅目談話会」が発足しました。3月10日に全国のアブ・カ・ハエなどの双翅目に関心を寄せる多数のアマチュアが京都に集まり結成大会を開きました。雑誌『はなあぶ』を発行します。同会は入会の案内に、昆虫採集の意義や楽しさを、採集会などの普及を通じて伝え、虫屋の次世代を大切に育てることもその目標に上げています。なお会長の大石久志氏はアリヅカムシの研究で知られており、新しい「評論」と「ねじればね」の表紙のデザイナーでもあります。事務局は〒605 京都市東山区今熊野日吉町 16 大石 久志方(Tel.075-551-0860)です。(伊藤)

「ねじればね」再出発にあたって

本誌は40年前(1956年)に『誌名とした「ねじればね」は既によく知られているように甲虫の仲間に入れられたり、あるいは非常に近い独立の一目とされたりしている興味深い寄生性の昆虫であり、♀は一生寄主の体内に生活する体の関節もはっきりと分れない幼虫形のもので、♂が短期間寄主の体外に脱出して、扇状の翅とび歩く興味深い習性をもっている。この寄生を受ける寄主は現在、ウンカ及び蜂類が最も多く知られ、カメムシ及びバッタ類其他多くが次いで知られている。甲虫の中のオオハナノミヤツチハンミョウなどと同じような過変態を示し一令幼虫は三爪形幼虫で寄主の体内にいる母の体から脱出して寄主によって花上や地上に運ばれ適当な寄主を見つける

訳であるが、面白いことに寄生を受けた昆虫は生命を失うことなく唯「ねじればね吸われ」という現象を起こし生殖能力を失ったりするとのことである。甲虫同好者の多い本会に生まれその寄生的存在である本誌にはこの「ねじればね」こそ最もふさわしい名であろうと命名した次第であるが、せいぜい努力して Host に「ねじればね吸われ」を起こさぬようにしたいものと考えている。』との創刊のことば以来、現在まで72号と継続して来ました。

この間、河野幹事および故後藤幹事を中心に、そして幸にして(?)寄主「昆虫学評論」に特段の「ねじればね吸われ」を起こすこともなく来た訳ですが、反面長年の寄生により、創刊時の元氣もやや弱って来たとも感じられる状況ともなっています。

今回「昆虫学評論」の51巻からの大判化(B5)にあわせて、本誌「ねじればね」も誌名からくる寄生ということから発展させて、今後は共生を目指して内容、頁数とも刷新を図って行きたいと考えております。当面、邦文論文および新記録の発表などと会報的性格を併せもったものとして再出発致しますので、会員諸賢のご投稿と忌たんの無いご意見・ご要望をお寄せ頂けますようお願い致します。(水野、伊藤)

会報

例会のお知らせ

長年例会は開かれていなかったのですが、学会の運営体制も徐々に整いつつあるので、今後年3回ぐらい(採集会を含めて)開きたいと考えています。それで再開第1回を9月29日(日)午前10時から大阪自然史博物館で開催いたします(午後4時頃まで)。標本を中心にした談話、同定会的なもの若干の講演などを考えています。ふるってご参加下さい。なお今年度の大会は12月8日の予定です。

会計報告

前号で平成7年の収支決算を仮報告しましたが、前任者との帳簿の引き継ぎが充分でなかったため、次年度繰越不足金などに大幅な金額の修正が必要となりました。そこで未報告の平成6年度の収支決算と併せて再度報告させていただきます。(野村英)

1994年度(平成6年度)収支決算書 (自 94年 1月 1日 至 94年12月31日)

収入の部		支出の部	
会費	1, 367, 750	印刷代	3, 089, 382
バックナンバー代	265, 850	通信費	233, 244
別刷代	109, 500	消耗品代	2, 466
印刷実費負担金	60, 780	大会費	33, 498
雑収入	207, 122	幹事会費	3, 280
特別会計より補填	1, 572, 537	雑費	5, 030
仮受金	1, 210, 000	仮受金引当金	1, 210, 000
次年度繰越不足金	999, 727	前年度繰越不足金	1, 216, 366
計	5, 793, 266	計	5, 793, 266

1995年度(平成7年度)収支決算書 (自 95年 1月 1日 至 95年12月31日)

収入の部		支出の部	
会費	1, 184, 750	印刷代	1, 141, 240
バックナンバー代	78, 450	通信費	275, 080
別刷代	109, 000	消耗品代	44, 979
印刷実費負担金	144, 480	大会費	39, 501
雑収入	200, 044	幹事会費	4, 210
		雑費	40, 000
仮受金	1, 518, 260	仮受金引当金	1, 518, 260
次年度繰越不足金	827, 923	前年度繰越不足金	999, 727
計	4, 062, 907	計	4, 062, 907

1994年度当初に設立いたしました学会基金は、会員の皆様のご協力により96年5月現在で166口に達していますが、目標額にはまだほど遠い額でございます。この基金は10,000円(一口)でございますので、当学会の財政を支援するため、なお一層のご協力をお願い申し上げます。

発行: 1996.6.15 日本甲虫学会

〒558 大阪市住吉区菟田2-16-5 レジデンス寿202 林 匡夫

Tel: (06) 698-2964 振替口座: 00990-8-39672